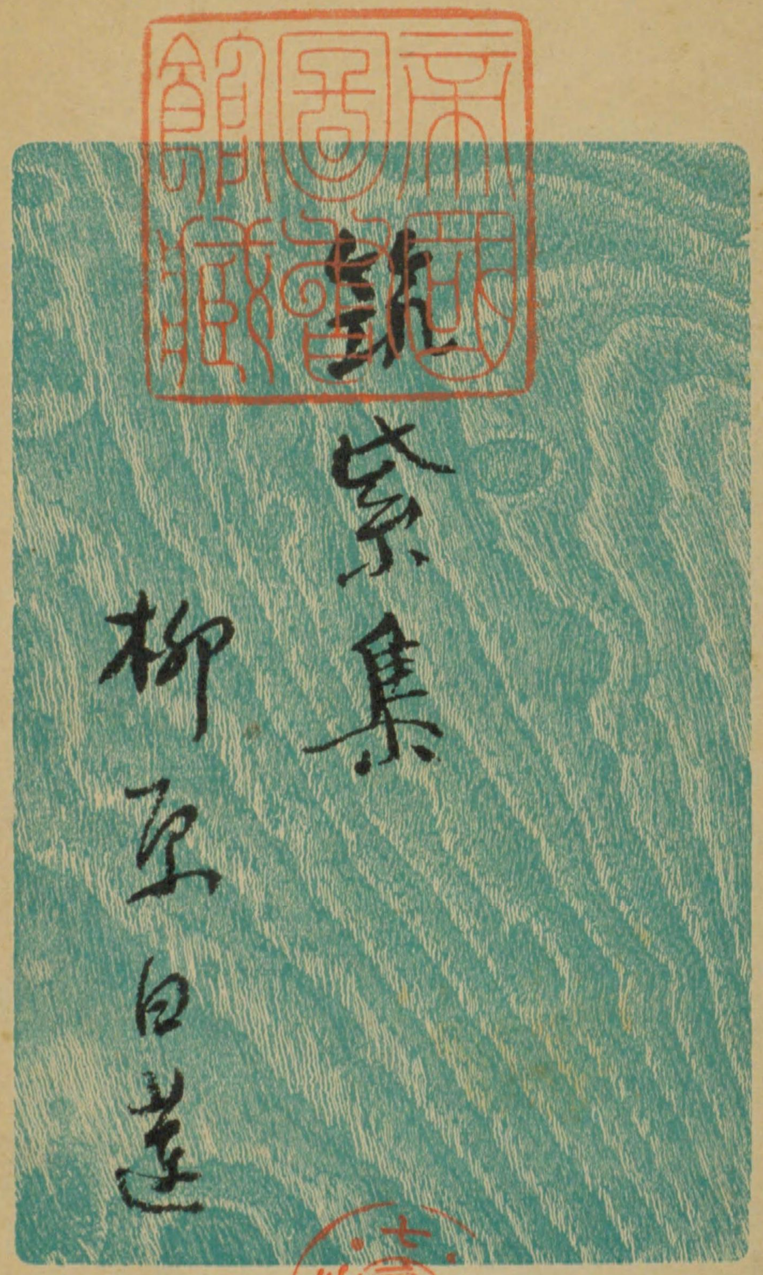
582

582-99

1200501522596

8.9.28


柳原白蓮
宗集

582-99

筑紫集　目次

一　蹈繪…（大正四年三月）……一
序　佐佐木信綱……三
蹈繪　三一九首……七
二　几帳のかけ…（大正八年三月）……一二五
香の札　九七首……一二七
いのり……一五一
雨……一五二
若い男子よ……一五四

現在と未來……一五八
吉祥寺……一五九
お染さん……一六一
浦島……一六三
世の中……一六四
女心……一六六
血……一六八
太陽と月と……一七〇
尾花澤……一七一
眠りに入るまで……一七七
幻の偶像……一七八

彼の死……一八〇
蠟燭の灯……一八一
舞扇……一八三
王妃と騎士……一八五
おかくれになつた二位樣……一八八
兵營の子……一九八
誠の戀は……二〇一
自畫像……二〇二
雪の日……二〇五
詩劇　阿難尊者と摩登伽女……二〇七
一　水のほとり……二〇八

二 煩惱……二一六
三 蠱道の法……二三五
四 婆昆多羅神呪……二三三
五 大幻術……二三八
六 祇園精舍……二六五

三 幻の華（大正八年三月）……二五五

摩訶不思議 一一首……二五七
罪のまほろし 三五首……二六一
御大典の日に 二首……二七三
御幸 四首……二七五
不知火 一四首……二七六

周圍の人人 一八首……二八一
育ひきみ 六首……二八八
はらから 四首……二九一
いとしき姪 九首……二九三
まらろど 三六首……二九七
春より秋へ 五九首……三一〇
几帳のかげ 六〇首……三三〇
旅路 五二首……三五一
湯の里 二〇首……三六九
珊瑚珠 二八首……三七六
仇なる花 一三三首……三八六

四　戯曲　指鬘外道……（大正九年三月）……四三一
序……四三一
現世の一……四四〇
現世の二……四五〇
現世の三……四五六
現世の四……四六二
現世の五……四一〇
現世の六……四七八
過去世の一……四八七
過去世の二……四九六
過去世の三……五〇二

過去世の四……五一三
みどり丸……五一九
筑紫集の後に……五四一

筑紫集　目次終

蹈

繪

蹈　繪

白蓮は藤原氏の女なり。王政ふたたびかへりて十八の秋、ひむがしの都に生れ、今は遠く筑紫の果にあり。緋房の籠の美しき鳥に似たる宿世にとらはれつつ、朝化粧五月となれば、京紅の青き光をなつかしむ身の、思ひ餘りては、あやまちになりにし軀の呼吸する日日のろはしく、わが魂をかへさむかたやいづこと、星のまたたき寂しき夜に神をもしのびつ。或は、觀世音寺の暗きみあかしのもとに普門品よむ聲にぬかづき、或は、四國めぐりの船のも

てくる言傳に悲しぶ。半生漸く過ぎて、かへりみる一生の白き道に咲き出でし心の花、花としいはば、なほあだにぞすぎむ。けにやこの蹈繪一卷は、作者が魂の緒の精をうけてなれりしものなり。而して、試めさるる日の來し如くに火の前にたてりとは、この一卷をいだける作者のこころなり。

古來女歌人おほし。しかもこれを作者にたぐへつべきをもとめむか、建禮門院右京大夫をはじめ、王朝才女の作は、感傷のひびき或は似たれども、作者に見るが如き情の强さと力となし。この點に於いては、むしろ狹野茅上娘子をもて代表しつべき萬葉集の女歌人に似たらむ。さはれ、その夢と惱みと憂愁と沈思とのこもりてなりしこの三百餘首を貫ける、深刻にかつ沈痛なる歌風の個性にいたりては、まさしく作者の獨創といふべく、この點に於いて、

作者はまたく明治大正の女歌人にして、またあくまでも白蓮その人なり。ここに於いてか、紫のゆかりふかき身をもて西の國にあなる藤原氏の一女を、わが蹈繪の作者白蓮として見ることは、吾等の喜びとするところなり。翼くはこの一卷永く天地の間に留まり、作者がわれと吾に與へむ物語ぶみとなりて、とこしへに生きむことを。

大正四年一月

佐佐木信綱

踏繪

われはここに神はいづこにましますや星のまたたき寂しき夜なり

われといふ小さきものを天地の中に生みける不可思議おもふ

蹈繪もてためさるる日の來しごとも歌反故い
だき立てる火の前

瞬間は稻妻のごと來り去るその束の間をわれ
人にして生く

有難き御經ぞとて示さるる白衣の人にすくせ
問はばや

吾は知る强き百千の戀ゆえに百千の敵は嬉し
きものと

疑ひは吾なき後もとこしへにこよひの月はま
とかなるやと

天地の一大事なりわが胸の秘密の扉誰か開き
ね

思出に泣かじとこそは誓ひつれ雄雄しきもの
となどのたまはぬ

吾につらき記憶の一つ殺してむ力し有らばい
ざ救ひませ

君なくてあらむこの身か人はそも天地をはな
れ長らふべきか

露まろぶ小笹の上の月影も命ありきと涙なが
るる

閻浮提かりそめの世は夢ながらかりそめなら
ぬ戀もするかな

或時は王者の床も許さじとまきしかひなのこ
の冷たさよ

心こめて童貞の尼がおくりこし聖書の句にも
慰まぬかな

けふの日もなほ呼吸するやふとしたるあやま
ちにより成りにし軀

吾を恨む人の言傳たのまれし四國めぐりの船
のかなしも

わが胸の王國の主よ統べ給へ二心なきみ民な
る吾

友とのみ思ふ心もあぢきなしふとして君が怖
ぢ給ふとき

何といふ鐘のなりやう哀愁のこの身をめぐり
夕暗に消ゆ

人の世の衆生歡喜の聲よりも吾に足ること吾に尊し

遙かなる君の戀ひしも大海の闇の奥より遠鳴すれば

月の輪よなど涙せぬさきの世のうらみの數のわが歌をきけ

わが魂は吾に背きて面見せず昨日も今日も寂しき日かな

骨肉は父と母とにまかせ來ぬ吾がたましひよ誰にかへさむ

追憶の帳のかげにまぼろしの人など入れて今日もながむる

妬みせで海なす胸に廣廣と人の戀をもよしと
たたへぬ

美しう君に背くといふ事もいつか覺えし悲し
き誇

幾億の生命(いのち)の末に生れたる二つの心そと並び
けり

女どち戀によく似るかたらひの文なども來ぬ
ありのすさびに

天地の命の果もかぎりあれや二つの心終りを
知らぬ

月も日も吾等が爲の光ぞといひてし日より天
地を知る

願はくはめぐる幾世の末かけてただわが魂の
清かれとこそ

人の子は始め終りを知らざりきこの天地とこ
の脈の音と

船行けば一筋白き道のあり吾には續く悲しび
のあと

死の前にたたずむ吾と思ふ時こころ靜けく涙
ながるる

わたつ海の底よりぬけし月の影大きかりしも
忘られぬかな

その時は門の小笹の風にゆれて夕ばえの空に
思ふ人のありし

観世音寺みあかし暗う唯一人普門品よむ聲に
ぬかづく

月に吸はれ潮に滿干の思ひとや彼のわたつみ
の久しかる戀

邪宗の子われにみとがめあらばあれ神より人
を敬ひおそる

昔見しやうなる雲はうつつなの思ひをのせて
いづくにか行く

今こそあれ吾死なむ日は秋の野の花の如くに
あらなむ願

ふと思ふ眞白き馬に鞭うちて弱き世の人ひれ
ふさしめば

罵りのしもともて打つ世の人よ知るや吾が名
はをみなとしいふ

なげくもの吾に來れとおほけなく思ひあがれ
る心なりしか

月はめぐるこのわがふめる大地にわれてふも
ののありとし知るや

開かぬやう神の作りし謎の鍵さびにしままに
終へむ吾が世か

筆をもて吾は歌はじわが魂と命をかけて歌生
まむかも

幾億の年かも經たる太陽の齡を思ふ小さき人
かな

忘れむと君言ひまさばつらからむ忘れじといはばなほ悲しけむ

命あれば千萬年の一大事みまつるものか悲しき生よ（諒闇の御時）

あなかしこ光と色と形との生れきぬべき大日輪よ

君に會ひ泣くべき時を命にて秋の七度生きてゐしかな

あひ見てはすねても見たく別れては泣きてあはれみ乞はむとも思ふ

西の海さすらひて來し一年の吾を迎ふる都の灯かな

ともすれば死ぬことなどを言ひ給ふ戀もつ人
のねたましきかな

寢臺車窓かけ少し引きて見れば月は寂しく吾
と共にくる

大天地小春美くしその中のちさき女はうれひ
に泣きぬ

小さくともわが目に入ればうつとうし數なら
ねども疎ましき人

女とて一度得たる憤り媚に黄金に代へらるべ
きか

後の世はあだともなれや今の世に死もゆるさ
ざる罪にてもよし

この心君に殉する雄雄しさを吾とたたへて今
日も暮しつ

狎れむには威ある姿のうとましさ十年の後の
その悔のかげ

秋の日や君が越え行く瀬戸の海の夕なぎ思ふ
濱邊に立てば

待つ人のあるが嬉しさ山越えて君にと急ぐた
そがれの道

何を怨む何を悲しむ黒髪は夜半の寢ざめにさ
めざめと泣く

日輪の七色よりもいや奇しき心の彩を分ち兼
ねつる

羽子板の押繪の君と添ぶしの春や昔のおぼろ
夜の月

オリオンよ火星よ空に居並びて吾を護ると君
に文かく

天人の五衰のなげき悲しくも寂滅といふも吾
が世の掟

われ戀ふの御詞つらし女なれば憎き心も言ふ
すべ知らぬ

神や知る結ぼれ解けぬ吾が魂はそもいづこよ
りいづこにか行く

誰か似る鳴けようたへとあやさるる緋房の籠
の美しき鳥

年經ては吾も名もなき墓とならむ筑紫のはて
の松の木かげに

誰にいひ誰に聞えむすべもなき涙の糧にわが
歌は成る

七里行き同じ流の水ときくにわがそのかみも
覺えて悲し

殊更に黑き花などかざしけるわが十六の涙の
日記

わが足は大地につきてはなれ得ぬその身もて
なほあこがるる空

命より命生れて幾かへり花より花も生れしも
のか

太陽はけさある如く明日もあらむそれよりか
たき誓せよとや

何ものか飢ゑし心に晝も夜も涙ながらにあさ
る俤

恐ろしき誘惑の魔かなつかしき神のみ聲か吾
が名をし呼ぶ

一つ一つ吾が魂の緒の精をうけよ逝きての後
のわが歌生きよ

この度は肥えて來よとの一言も涙なりけり人
の情の

よるべなき吾が心をばあざむきて今日もさな
がら暮しけるはや

このところ永久の住家にあらざればとく行かむいざ天のあなたへ

若き日も美しき日も暮れ果てて戀の外なる悲しみぞ湧く

したたりのこの一雫數千年の祖の血汐も流るるやなほ

吾が心みどりの雨にとけ入りて小草の花も咲かばとし思ふ

成らばよし成らずばそれもよしと思ひ心易かる此頃の性

君と別れ今は筑紫の人となりて君なき里の梅の花見る

わが夢も青葉若葉にとけ入りてかろき心の朝
ぼらけかな

朝化粧五月となれば京紅の青き光もなつかし
きかな

しよざいなさありのすさびに君戀ふといはば
やいかに魔なる女よ

春雨や灯(ひ)ともし頃の湯の里の行きかふ傘に眞
玉つらねつ

こともなく終へむわが世の運命(さだめ)にも君を得し
幸失ひし幸

久方の月見草咲く筥崎の濱の松原ただ一人行
く

殘しこしわだちの跡も山越えて君があたりに
續くとおもひ

心よし絹蚊帳をなぶる風すこし麻のしとねに
よみがへる時

破れ鈴のやうにひびかぬ君にして音を聞かむ
とし待てるさびしさ

秋來れば博多小女郎もなげきけむ波の遠音に
人の待たるる

御夢に入るわが影の清かれと手燭とらせて鏡
にむかふ

大わたつ海夕日の色のあかあかと燃ゆるさ中
に身を投げてまし

寂しさのありのすさびに唯ひとり狂亂を舞ふ
冷たき部屋に

ほの光りをぐらき胸にさし初めて美醜のかげ
のうつるも悲し

とこしへに君が名呼ばじ松風は袖の港に音を
絶ゆる世も

わがために泣きます人の世にあらば死なむと
思ふ今の今いま

何事か地異天變のあれかしと願はるるかなあ
ぐみ果てては

今日まではわが命をばいたはりぬ後に見るべ
き悔とも知らで

命をば今宵限りといふ時もつひにもだしてゆ
くべきさがか

女房のふところなれば鬼も棲むなどいふ詞ふ
と覺えけり

君に得し心なる故わが胸の王國の主よみ楯と
ならむ

美くしき戀唄うたひ灯のかげに舞はましもの
を銀扇かな

頼みつる夢にもよべは會ひもせで置く霜白き
冬の明方

大海をへだてここに語らひし美くしき日よ
久遠に生きよ

あゆめどもあゆめども足の進まざるかの夢に
似て喘ぐにつらき

命死ぬ人のむすめに百年の後を誓へと言ひま
しし人

主なきみ空の星とたぐへては心和みぬへだて
もなけれ

天地のもろもろよりも尊かる君が命と思ひ初
めてき

よき歌は君と二人のいとし子を生まばや今日
も幸多き日よ

思ひ出は今入り殘る落日のあかあかしさのそ
の色に似て

わが歌に吾と涙をそそぐ時またあらたなる悲
しみぞ湧く

病み上り落髪束にあまりぬれば黄楊の小櫛も
泣くかとおもふ

天上の花の姿と思ひしはかりねのやどのまぼ
ろしの華

汝がための神の使命はいづくぞやいためる胸
に今日もささやく

夢かあらぬうつつかあらぬ遠方の雲のあなた
に吾が名呼びます

怖ろしき毒矢のがれてそぞろにも涙こぼるる
この夕べかな

御姿もみ聲も聞かぬこの住家千里のをちといづれか遠き

憎き人の悲しきうはさふと聞きて吾にもわかぬ涙ながるる

悲しかれいよよつらかれ天地の運命（さだめ）呪ひて命果つべく

物言はば涙もあらむをくちなしの花に似たりと君はのたまふ

奈良の鹿は優しき目してもの古りし燈籠のかげに吾を見まもる

この世をば限と思ひ涙してありし昔の愚なるわれ

ゆくにあらず歸るにあらず居るにあらで生け
るかこの身死せるかこの身

心憂きこと言はれても情ぞと笑みてあるべき
女のすくせ

うとくして在り經し人の今更に何戀しくて涙
こぼるる

わが夢のとけて流れて久方の明け行く空に入
るかとぞ思ふ

停車場の柳のみどり深くなればあづまの人も
歸り來(く)といふ

むづかしき人の世つらし夢にだに思ふか儘の
吾となさしめ

何物も持たぬ此身の重荷ただ吾はわが身をいかにかすべき

心にはたたへてぞゐしその人を口にはいたくそしりてぞゐし

ますかがみよ十八の春も知るらむはたちの秋も

何故に誰がためにかも生れこしこの一事を七年おもふ

かくばかり靜かなる夜の天地に人の子などかは涙多かる

とくとくと十やはたちは老いよかし若きうれひの然らば枯れなむ

思なく何も願はで日は暮れぬ何も望まで今宵
はたぬる

石の床石の枕に旅寢してあるが如くも冷たさ
に泣く

誰がために落す涙ぞ誰がためにほほゑむ吾ぞ
女てふ名に

こし方の罪も消ぬべく筆とりて御經(おん)うつす秋
の夜な夜な

吾なくばわが世もあらじ人もあらじましして身
を燒く思もあらじ

おだやかに過ごしし春よ秋の夜よ若かりし日
の若かりし胸

つむじ風吾をめぐりぬかかる日に花の姿も散り果つべきか

うもれ果てしわが半生をとぶらひぬかへらずなりし十六少女

冷やかに枯木の如き僞りを人の道としいふべしやなほ

いくたりの浮れ男の膽を取る魔女ともならむ美しさあれ

眠りさめて今日もはかなく生きむため僞りをいひ僞りをきく

王政は再びかへり十八の紅葉するころ吾は生れし

この心いつまで續く知らねども今日は樂しく
唯嬉しけれ

筥崎のみやしろの前に神鳩と遊べる人を吾と
おもはせ

不可思議はいづこより來て種蒔きし屋根の上
なる紅の花

雨降ればのそりのそりとひきがへる汝もや思
ふ天地の謎

かめの水吸ひつくし果て凋みける花にひたす
ら罪を悔いけり

天つ神よ君がいとし子世の波に浮き沈みせる
吾しろしめすや

天と地と雲と水とにながめあかぬそれの如く
も生と死を思ふ

ともかくも今日も事なく終へにきと生けるが
儘に生きたるこの身

知らぬ人に今日を初めてあひにける心地にむ
かふ十年見し人

何か罪つみや如何なるつひの世のさばきの前
の冷たきむくろ

君をしもまどはしまつる人のあり悲しいかな
や夢の國人

あけぼのの霞の中をわけわけて天がけり行く
我が心かも

いつよりか吾が胸の戸の奥深くいつきまつら
ふその保ぞ

いつの日か繪卷に見たる東福寺通天橋にちる
紅葉かな

汽車の窓ゆ眺めつつあれば一つ消え二つ消え
ゆく都の灯かな

泣きぬれて今來しものをあはれとも驚きもせ
であひ見る人よ

姉妹の中にかこみし火桶さへ冷たうなりて夜
は更けにけり

折折は涙もまじる夜語りに小さき甥はただも
だし居り

蹌踉と今日もあゆめるこの身かな疲れ果てに
しその後かげ

底知れぬ心のなやみ呪ふべく歌を綴れり吾と
いふ歌

命ありてここを再びふまじとの道をあゆめり
遠國の旅

甲斐もなく吾とわが身をせめつつも鞭うちつ
つ衰へにけり

野の中の小さき道に從ひて吾は行くなり行方
も知らず

行きなれし麻布の寺の大公孫樹その木の下に
落葉つむらむ

吾知らぬ涙ぞ落つる小雀の餌をあさる見ても
何か悲しき

しづかなる天地のうちにただ一人生れしやう
の寂しさに泣く

なげきつつ芝居のやうに思ひけりあまりにつ
らき吾をあはれみ

花咲きぬ散りぬみのりぬこぼれぬと吾知らぬ
間に日經ぬ月へぬ

毒の香たきて靜かに眠らばや小がめの花もく
づるる夕べ

人の世の掟ならはしその前にいふよしもなく
唯涙する

故知らず明日を思へばうなだるる胸の重さに
心をののく

疑はし明日の運命は知らねども思へば今日の
安かりしかな

女とはいとしがられて憎まれて妬まれてこそ
かひもあるらし

いぶ事も答ふる事もわが外の世界に住みて今
日も暮しつ

今日もまた髪ととのへて紅つけてただおとな
しう暮らしけるかな

うつらうつら今日も暮しつ悲しかる歌のみを
得てこの年も行く

わが胸の心の花も暖かう咲くかと思ふ春の夜の夢

ゆりかごの中に小さき身を置きて夢をのせたる日もありしかな

今宵また御經寫す靜けさに邪執のかげも消えて行くかな

雪の道君に逢ひたさそぞろ來ぬといふ人あらば夢に來よかし

吾は强し怒りを胸にたたみつつ思ひなほして空ゑみもする

緋桃咲く夕べは戀し吾が夫も吾を妖婦と罵りし子も

一を二と讀むすべ知らず知らざれは智慧足らぬ子とかろしめらるる

見し人も見ざりし人も若き日の戀によく似る春の夜の夢

呪へども消えぬ思の憎さより心にかけて忘れ得ぬ人

青葉若葉風にささやきうなづきて日もあたたかき初夏の空

目閉づれば色も形もなき如く命絶えずば盡きぬ思か

香料をたきて祈らく思へらくただ今日の日も安かれとのみ

心なく引きし糸よりはらはらと編物とけて失せける形

幼子の如くに泣きてすねて見たや君にあはぬが悲しといひて

天上の陽の色戀うて日向葵は昨日も今日も後追うて咲く

吾が思ひ炎のしづくここにこりて歌ともなれとせめて祈らむ

妬みとや戀とやつひに定まらずふとあらはれてふと消ゆるかげ

何を待つ誰待つ時を待つとても心足る日のなしと知る知る

水の如流れ行く身のおもしろや浮べる月も散り來る花も

おとなしう身をまかせつる幾年は親を恨みし反逆者ぞ

あなうたて君きみたらで吾ばかり今日の此日もまめやかに居り

隅田川水鳥なけばありし日の俤うかぶ戀ならねども

紅き花床にうづめて三千里遠つ國なる夢の華ぞと

まどろみし夢の中なる一時にわが百年は過ぎこしものか

夢といふそは吾が生のすべてかやこころ足り
しもかの一夜ゆゑ

木枯は梢よりして吾が胸に吹けば亂るる寂し
き日かな

野のすゑか海の果かも吾が魂は否否とのみ行
方も知らず

夜來ては悲しき歌を敎ふなる魔の姿かも君が
文見る

み社の鳥居の上に石投げてのりものらずもは
かなき吾が戀

かくれ家も一人は住まじふとしては幻に見ゆ
はなれ小島よ

殉教者の如くに清く美しく君に死なばや白百
合の床

あすの日は爐に投げらるる運命もて野に咲く
ものを吾と思ひし

疑はれあぢきなき日の迫り來て吾が身いとし
くなりまさりけり

そのかみの或日の夢をうつつにもかへさむと
すや悲しき吾よ

昔より吾あらざりし其世より命ありきや鈴蘭
の花

わが歌と涙とゆめに培ひしこの心根に花を咲
かしめ

わが爲にまもる心と人の爲ゆるす心と君はあ
りにき

願ひとは泉下の人の甦り吾がいたづきを守れ
とのこと

いき絶ゆるその刹那こそ知るべくや死(しに)の趣戀
のおもむき

八熱の地獄の底か安らけき吾が淨土かとえら
ぶに堪へぬ

このからだ土は十尋の底にして死にまさりた
る喜びや知る

すべてのもの空しき名かや吾といふも吾より
强き戀といふさへ

火に怖ぢよ水におぢよと世の中の怖ろしさの
み習ひつる吾

たはむれかはたや一時の出來心われにすべて
を投げすてし人

あひしとふ事を悔ゆるにあらねども涙多きも
君あるがため

いつの日の君が涙のゆめの跡今わがふめる道
の邊の花

死にまさる知慧もて開く吾が胸の重き扉を誰
そ誰そたたく

いつの日か人に心を盗まれてうつろとなりし
身のおとろへぞ

吾知らぬ思に育つはるの雨のび行く心人に知
らゆな

ありし日のすべてを忘れわが外の人ゆるすな
と君をこそ思へ

束の間をこの世に長きちぎりとも思ひきはめ
て命終へばや

斯くてなほ御疑ひのはれぬ日の吾が身いとし
さ物狂ほしさ

いつの時いつの日までか君を待つこの心して
ありぬべき身か

何ものか追はるる如く追ふ如くほしいままな
る喜びをする

かかる日もまどひを知らぬ心かや審判の日に
も終りの日にも

神にしてゆるし給ふや時の間のその束の間の
めしひし心

知らざりき知りにき二なき美しき命のあたへ
今ぞ知りにき

はかなかる刹那刹那の喜びに生きてもゆくか
衰への身の

けふの日も君より外にゆるさじのこの身尊と
み畏こみてゐぬ

その如くいとやすやすと與へたるものとや思
ふ女のいのち

かの時のかの一言の忘れずば忘る期あらば戀
よ呪はむ

いつはらぬその誠をば喜びつその誠をば憎し
と思ふ

今を忘れこし方忘れ後の世の思の中にわれ生
きむかも

二十四時わかれて後のはるけさよ吾が生涯を
待つ如わびし

くさむらの蟲に等しき戀すやとわが世の人の
口さがなさよ

ひたひたと心は水にとけて行く大海原の波の
行末

南洋の果物なども美しき食堂にして君をおも
ひぬ

三百里われといたはるおとろへの此身やうや
う都に入りぬ

求めても得られず遂に願はざるその事なりて
足らはぬ心

背教者それもせんなし生よりも死よりも重き
荷を與へられ

ベコニヤの花の眠ると君が來ます夕べのくる
といづれか早き

美しき夢をぞ昨夜(よべ)は見たりしと日記のはしの
うら寂しけれ

朝の雨楓もみぢのうすきよりうすき喜びふと
ただよひぬ

君と別れ一年ぶりの吾が顔は寂しからまし泣
きて經ぬれば

壽量品うつしまつれば後の世にあはましもの
とみあかしの影

海見れば涙わりなくこぼれおつ今のこの身を
歎くといはねど

わが胸の心のあるじとこしへに歸らずなりて
衰へしかな

數千年の歴史の末に君といひ我といふもの生
れこしかな

事なくばなきにつけてもいと寂しああわが心
何をもとむる

わがこの身大磐石の上にありと思ひしものを
心のゆるぎ

君をおきて尊きものの世になしといはばや足
らむ吾にぬかづき

妙法華經勸持品よむ昨日けふ現世のせめも忘
られにける

めぐり來ねとくめぐり來ね天地の中の吾靈に
よころびみつ日

一人のひとを思へば七たりの友みな憎む我を
呪ひて

鴨川やわが來し方の過ぎし日と靜かに流る今日も昨日も

わすれたるあてなきものを思ひ出でて求むとやうにいらだつ心

いつきます君としさへも戰はむ宿世をもちてなど生れこし

執着すただ何となく思ひ入る人の子なれば理りは知らず

世の掟人のをしへもうべなはぬ心のつかれ神にゆかばや

暴れくるふこの雨風の心地よさわが心はたしじまやぶらな

夕さればあかるき空の三日月のそのいとしさ
は吾もありきや

苦むせる墓の一つは幾世へしわがそのかみの
われにてありき

偶像も變化もわれはうやまはむ今この心いや
す道あらば

太陽の東に出づるそれすらも疑ふむねに明日
と契らじ

いつきまつる昔の人のたましひの聲もするか
や御經誦せば

香のけぶりゆれてめぐりてほそぼそと消えゆ
く方に心すはるる

夢なりき彼の大事すら唯しばし時てふものの
あしきたはむれ

眞珠色の月の光になげかるる夕べとなりぬ今
日も日くれて

美しき戀の牢獄(ひとや)の手ぐさりに昔の人もおとし
しなみだ

執念は白骨となりて足りぬべきその日を待つ
かいのちつきなば

かかるおもひかかる涙も女ゆゑやごとなき身
のわが宿世ゆゑ

御胸に入る日もあるか罪の子の僞もののわが
宿世かな

何ものももたらぬものを女とや此身一つもわ
がものならぬ

生れかはり又こん世にもわれとならむ嬉しき
にゑみ苦しきに泣き

吾に何の與奪の權のありぬべきなど蝶の床の
花をむしりし

佛者がいふ色即是空の悲しさよ女の前につれ
なの言や

今日もまた昨日のままの吾にして一昨日の日
の涙かわかぬ

つつましう母に侍りてありし日の吾にもあら
ぬ今日のさまかな

眼とづれば吾身を圍む柩とも狹く冷たき中に
をりけり

女とは世とは道とはうきつらき生ける限の謎
にあらじか

清ければ女二十の若ければうき事のみぞふり
つもるかな

わびぬれば名もなき者に手をつきてあやまら
されし恐ろしの夢

さめざめと泣きてありにし部屋を出で事なき
さまに紅茶をすする

あはれさはいたづらぶしの床の上に神のいさ
めの人おもふこと

つはものよわれ追ふ者をとらへよと命のきは
も戰ふものか

百人の男の心破りなばこの悲しみも忘れはて
むか

從ふか共にゆくかとまぎれては人の心をたづ
ねてぞゆく

百年の後まで閉せ開くなと追懷の城は君こそ
護りし

いくたりかめでにし後の一人ぞと吾を見出で
し其さびしさよ

君に待つそは暴君の行ひと知りつつ猶も理り
とする

風に鳴る葉ずれの音もさびしけれ逝きにし人
の聲もまじるか

鶯は今をはじめの音の如く昔をおもふその日
をおもふ

風もなく雲も動かず天地の寂寞の中の胸のと
どろき

われをして斯く歌はしめ祈らしめ今日あらし
むる奇しき導

わがわれに與へむとするは百年の後に生くべ
き物語ぶみ

蹈繪終

几帳のかけ

香の札

大前に君が名呼びぬ千歳のいのち生くべき名
よとまうして

思ひ迫りはこびし筆の許されぬ罪かのごとく
うち嘆かるる

逢はまほし逢はむと應らへ斯くてなほ許さぬ
もののあるここちする

雪や降る人の心のつめたさのなみだや凍る夜
半の寢覺めに

いとけなき我魂をもてあそぶ人よとおもひ憎
さまさりぬ

たましひの胸のうつろに歳經てはさびしき鬼
のすめりとおぼゆ

ほの青く雪ぞふりぬる如月の風邪のここちの
窓のガラス戸

なつかしき日にてもあるを我心悲しきものと
あやまたれける

見えぬほどうちふるふかな我胸と君がかたへ

のシネラリヤの花

君とゆく音羽の町のたそがれに淡雪のちる如

月半ば

言ふことはまこと心の聲ならずいつはりなら

ぬ空言をいふ

過ぎりかね雪どけの道たたずめばこなたへと

言ふ君がまなざし

十種香今きくかをり伽羅の香か人の心の白菊

の香か

一か二か心あてなる香の札かちりと音しゆら

ぐうつり香

千鳥てふ銘のみ笛をかい抱けば昔男の袖の香
ぞする

いづ方も王土にあらぬなけれどもこの山かげ
の淋しき一つ家

嵐吹く峰のさくらの散るかたに花やしたがふ
風やしたがふ

鐘のなるたえまたえまに花降れば魂も消ぬが
になみだをぞする

春はゆくいざ我れもまた筑紫路の山のあなた
にかへりて住まむ

ひむがしの山ふところに月も寢て男女もみな
しづまりぬ

捨てられし戀の恨みかあらず今人にかくれて
逢ひにゆく我れ

鈴の緒にかけしその手をさながらに得やすき
ことを祈るわびしさ

明け初めし四條通りは覺めやらで電燈あはし
朝靄の中に

もえ初めし幼き心あやまてりそのあやまてる
人を見れども

いつしらず心あやふくなりにけり他ごととし
て聞き流しつつ

今更に憐れまれてはなぐさまず一人ひそかに
守り來しものを

きさらぎやふるさとに來て病みぬれば姉に看護られ母におもはれ

旅に來て姉のみとりのあまやかさなぐさむほどのいたつきをする

御經を枕にしきていねにけり常にもまして淋しき夜ゆゑ

ふりやみて軒のしづくに傘しいざとばかりにうけし侍女(こしもと)

甘えてはすこしの無理も言ひて見つ滿ちたらひぬるかろき心に

汽車の窓ゆ富士の高嶺を見いでけりをさなき日より睦じきもの

我都我ふるさとは日輪のいでて迎ふと汽車の
笛鳴る

なぐさまず世の道を越え法をこえ人目の關を
こえて來つれど

さながらに現にここに逢ひながら何の恨みも
湧かぬさびしさ

あはれめよされども戀をするなかれはるばる
來ぬる文のをかしさ

唯一人守りて育てしかなしみはよしや君にも
など許すべき

齋きまつるまぼろしの宮と我れよびて詩(うた)たて
まつる常夜のともし火

神の代もかかる沈默(しじま)の時やあるかかるさびし
き夕ぐれやある

ふるさとに見しおもひ出や梅の花少女なりけ
りこの頃なりし

天地に媚びて咲くかと梅の花ふけふけ散らせ
炻たしかはゆし

七年を住みなれ來れば媒煙にうすよごれたる
白梅もよし

いと正しき平行線をまなべとや末の末まで交
はるなきを

虛僞はうれし人の心を悲しむる世の運命をも
くつがへらしむ

蝸牛の觸角ほども慧からばなどかこちけりつ
れづれの日に

何となく修道院にあるごとく肉食をせず夜の
床に入る

精進にある日は清くうつくしくいと細やかに
心のぬるる

いま淋し末はしらねど思ひ出の國にゆくべき
すべもあらなく

我れはわが求むるものも忘れけりわすれて後
の胸のひろさよ

カナリヤの籠より出でてかへり來ぬ夕さびし
き窓の内かな

忘れても師のかげ蹈むな唱へごと云へばこぼる何の泪ぞ

晝と夜花と紅葉の相會はぬちぎりと誰か定めおきけむ

ゆきて來し道の消ぬまに歸らばや雪降り積もる音羽の町を

三百里君をたづねて逢ひに來し龜原あたり春の雪ふる

櫻さく頃ともまがふあたたかさ如月半雛買ひにゆく

○この上に何をか求めむ末かけて唯自らを信せしめたまへ

陀羅尼品呪文の如く口ずさむあまり淋しき夕
ぐれの空

昇る爲沈む夕日よちる花よ別れは何の初めな
るべき

美しき眞珠の玉はころばせど振れども鳴らぬ
何故鳴らぬ

普門院の二體の秘佛相抱き御厨子をとぢて籠
りておはす

破れたる船にたよりてあへぐより危ふし悲し
我人による

おぞましや女心はこがねもて男心は血もてあ
がなひ

誰により胸にまかれて培はるよろこびのはな
かなしみの花

いとしさはこのおち髪の一筋も我身にそひし
ものよとおもへば

素袷のもみうら肌にこころよしかろき冷めた
さほのあたたかさ

二百度の泉湧きたつ地獄池人身御供に肥えし
血の色 （別府血の池地獄）

乳母にわかれ七日七夜を泣きくれし幼きなみ
だ今もこぼるる

散る花よ無情よ戀の住む里よかすめる空に櫻
あめ降る

忘れては夢よりもなほしみじみと枕上に來る
もののけのかげ

海苔やけば海の味はひとほとほと君を離れて
思ひ出づるもの

神に祈る感謝のことば常人の多くをしらぬ歎
きをばえし

我れ死なば詩の御神がゆりかごの花のしとね
に臥さしめたまへ

寢しづまり廊下の燈りみな消えて妻戸を洩る
る雪明りかな

つつしみて戀を語らずもの言はず十六の日は
斯くて過ぎしか

物賣の聲にまじりてざわざわとかたはれ時の
町のさざめき

落日はあすの譬ひとおろがみぬあすは越えゆ
くふるさとの山

苔かたき椿の花のさかぬ間にいざやかへらむ
野こえ山こえ

ふと見れば小櫛に似たる月かげのほのかに浮
ぶあかるき夕ぞら

髪梳かず口紅とかず歌百首まゐらせむとて物
いみをする

幾千度晝と夜とに別れけり人と吾との恨みを
も得し

ことごとし世人のそねみ我戀は歌のまぼろし
夢の中の夢

朝まだき東寺の鐘もちる花も夢と現の境をぞ
ゆく

けふよりはまた逢ふまでの別れぞといふて暮
して何時までまたん

封筒の表書きこそうれしけれよき名をかけば
うらがなしけれ

赤き星むらさきの屋黄のほし森の奥より輝き
出でぬ

雲はゆく巨人のごとき手をひろげ物追ふごと
く走りて消えぬ

大地もこの大空もうみ果てぬうみていづくに
逃れむとする

美しう靄の包みてかへるさの我影ながらなつ
かしかりき

微風は花の木の間にささやきぬかかる夕に詩
作らまし

止まりたる時計の針も一度(たび)は誠を示す時にあ
ひなば

かをり固く蕾の中にとざされて春を待つさへ
ねたしと思ひし

來るべき花のさかりを待つ時もただ何となき
物怯ぢをする

咲く花は何の咎とて吹かるるや散るは涙は何
の罪ぞも

君がいふ花の言葉はしめやかに小雨降るなり
春のともし火

春くれば神のめぐみを身にしめて我れうたは
まし天地のうた

吹く風も流離の人にことづてよ別れてのちの
心さびしさ

おなじ世に生れあひたるあはれさよ生れあひ
つるこの悲しさよ

誘惑のあまさくるしさなつかしさかかる夕に
我れや死なまし

重ねたる心と心小車のきしむが如き音をたて
てなく

涙ぐまる我少女等よ報いなき戀をするなと思
ふばかりに

いのり

（一月　伊勢に詣でて）

神の大前に直き純しき心もて
祈らまし　申さまし
我が日の本を親として生れたるはらから
我詩の國を建設すべき人々に
その位と力とを與へたまへ
永久の生命を惜しみたまふな

雨

かあいかあいのいとしいものよ
雨がふつてるしめじめと
どこら邊りを旅してか
わしが上など思うてか
あめがふるふるはらはらと
袖に袂にぬれたなら

わしが涙と見てたもれ
きみと別れてけふ幾日
夜も晝もなく暮してりや
魂ぬけたもぬけがら
早うかへしに來てたもれ

若い男子よ

一

若い男子よ　二十幾年の世の戰ひに勝ち誇つてわたしの手に歸つて來たわたしの子供よ
お前はたたかひに克つて來ましたといふ
成ほどおまへの身には少しのけがもなく傷いたところもなく　お前が世の中に母の胎を離れたままの清淨な身を持つて歸つて來てくれたのだね

だけれどお前の其の誇りの笑ひの中にかくしてゐるものは何だえ？
其の苦がい涙の跡はどうしたのだえ？

二

おまへは今目の前に與へられた現實の箱の中に樣々の美しい過去の幻を納れて喜んでゐる
その狂者のやうなよろこび　それを私はいぢらしいとも可愛いとも思ふ
そして又こんな心で戀はれ慕はれてゐる娘を可愛くいぢらしく思ふ

星の光る春の夕べわたしの子供が現實の箱を抱く時若い日にただ
一度のよろこびを神樣あたへてやつて下さいまし
かはいいわたしの子供等の上に

三

わたしの息子よ
お前は無位の王者となるべきものだ
少くともわたしはさう信じられる
なぜならおまへは自然が與へた人世の道を逆らひもせずすなほに
從ふやはらかいこころ
虛僞と卑劣とを嘲罵する鐵のたましひ

それは父と母との中に生れた冷熱の子だもの
太陽の火と　大洋の水と
それがおまへの肉とたましひであることを忘れてはならない
お前が男の父と女の母から生れたことを忘れさへしなければ

現在と未來

一人はいひぬ　「同じ世に生れあひたるよろこび」と
一人はいひぬ　「同じ世に生れあひたる悲しさ」と
二人はいひぬ　「後の世を見む」と

吉祥寺

親の許した仲ではないが
魂のない人形なら
戯れしてもよいものかいな
君と思うて頬すりよせて
ゆふべ二人で寢てさめた
人形のやうな吉三様

人形によう似た吉三様
私の心は雲雀のやうな
千度　百度　名を呼びまする
そして雲雀の空飛ぶやうに
私のこころは飛んでゆく
吉祥寺へ　吉祥寺へ

お染さん

おそめさん！　おまへはどこへおゆきやる
裏の畑の南天に　一寸用事がありまする
「てるてる坊さん〳〵どうぞあしたは晴れますやう
もしも願ひが叶うたらお前の好きなささたべさせて
川へ流して進ぜましよ」
「お枕さん〳〵あすは七ッに起してたもれ」

赤い枕の舟底を　とんとんとんや六つ七つ
結綿の赤い鹿の子が夢を見た
見た夢　どんな夢　話されぬ
いうたらみんな消えるそな
大事な〳〵夢ぢやもの　獏に喰はせてなるものか
おそめさん　おまへはどこへおゆきやる
裏の畑の南天に　昨日結んだてるてる坊主
ささの代りに水たべさせて　溝へ落してやりまする
空でも泣いてゐるやうな　お染の目からも降りさうな

浦島

浦島太郎は歸つて來て
百年前の人戀うて
墓場の前で泣いてゐた。
墓場の主のいふのには
乙姫様もいうたでないか
玉手筥をあけてはならぬと。

世の中

私の短かい命をば
長い天地にくらべては
渡る世間は時の間よ
その時の間もわたしには
人の迫苦がつらいもの
わたしやいやぢやと泣いたれば

弱い人ぢやと笑はれう
思ふこころも云はれずに
しくしく泣くが運命ぢやと
いふたら又も笑はれう
理性の心かつときは
情の心のせめらるる
情の心のかつときは
理性の姿かげきゆる

女心

妬みをしらぬわたし
そねみをしらぬわたし
神のこころのわたし
人間の心が誠か
神の心が僞りか
天地にも比ぶる廣い廣い戀の衣に

凡てのものを美しう
すべてのものをいさぎよう
暖かい小さい胸におとなしう包まうよ

血

私の胸に流るる血しほ
恐ろしい誇りと權威と力と
固く閉された胸の血汐
かつては流れもせなんだ
こりては　ゆるぎもせなんだ
此むねのちしほ

何もののささやき
何の火熱ぞ
日に〳〵一滴づつとかしゆく
あのおそろしいひびき
血汐の高なり
今は聞くに堪へず。

太陽と月と

太陽と月とはなぜ同じ所に並んで居ない
神學博士に聞いたら
それは神の攝理だと敎へた
理學者に尋ねたら
それは並んだところで　太陽の强い光りで月の影は見えぬので
す　あなたは日中の星を見た事がありますかと　問はれた

親のいふのには
それはおまへ　あたりまへよ
親のいふ事が一番短くてしかも逆らふ事が出來ない　さうであつた　お月さまとおてんたうさまと御一所にお住ひにならない
まして　私が……

尾花澤

一

夏の半に秋が來て
秋の初めに冬がくる
北の國にはおそろしい
手鞠のやうな吹雪ちる
尾花澤の日くれがた
雪の精かと見まがふやうな

紫袴の美しい
はたちばかりの若殿御
どこの國から何人の
子とも名のらず現はれて
今いくとせの春秋を
この草庵の佗び住ひ

二

おでゐ樣　おたた樣
鷹はここに居りまする
許したまはれともかくも

父の肉故破られず
母の血故に流しかね
我と殺さず傷つけず
あぢきなき身のいとせめて
親のかたみとかしづきの
うつろ心の淺ましや
ふと目に浮ぶあで姿
軒端のなだれ音たてて
醒れば悲し雪の國

三

村の娘のいふ事にや
今宵も月がよいほどに
若殿樣の笛の音が
あれあのやうに聞えるに
妙なるしらべする時は
お天井からしとしとと
露もこぼるるふしぎさよ
殿に習ふた舞の袖
「げに妄執の雲霧の
迷ひもよしやうかりける」

雲井の空が戀しいと
殿の雲井はとこぢややら

尾花澤は昔或る公家の子が何故とも知れず家出して北國に其の短かき生涯を送りし事實に依りてのべたるなり

眠りに入るまで

ひとり目醒めし床の上
夜はしんしんとふけ渡る
ともし灯もなき眞の暗
一人泣かうと笑はうと
誰もとがめぬ夜の世界

幻の偶像

見たこともない私を　なんでそのやうに
おどおどとしたあの様子
私は何もかもしつてゐます
幻の偶像となつて抱かるる私を
私はあなたに遭ひますまい
活きた顔を見せますまい

その像にお手を觸れたなら
忽ち破壞されます　崩れます
それが悲しく　傷ましい
いつの世までも會ひますまい
つの日までも思つていただきたさ

彼の死

彼は凡てのものに別れた
私は一人の彼に別れた
つまり私が彼に死したのである
やがて私自身の死を凡ての者に與へる時が來よう

蠟燭の灯

一つのらふそくの灯
二つ三つ但しは百、千
その光りをうつしたとて
元の灯の光りは少しも失はれはしない
私のたつた一つの心の灯
それは微かなものだけれど

それでも戀の最初の光りであつた
年ふるままにいくつかにうつした
一本二本但しは百、千
見もしらぬものにすら
そつとうつしてひとりながめた(片戀も)
それでもやつぱり元の灯は
少しの光りも失はずに
清淨の少女の戀をもつたままに
今も細々ながら心のかげに火ともして

舞扇

京でもとめた舞扇
春の夕のさびしさに
「なうなう俄に村雨のして
花の散り候ふはいかに……」
一さし舞うて見たなれど

淋しいこともういこと
若い命のかぎりをば
かうして泣いて暮すのが
やる瀬ないよなあの影法師
くるくるまはるあの姿

王妃と騎士

お前はあんまり私の側によらないでおくれ　遠くに離れてゐて
さうだ　さうして私をあんまり見ないでおくれ　見てはいけない
よ
世間の口がうるさいからね
お前は私の事をお云ひでない　美しい王妃だともお云ひでない